

映画「町を歩けば」



出演：藤沢玲花、大野寛美、イキル
監督・脚本・編集：伊藤有紀
撮影：今野良成
企画・制作・販売：株式会社ジェイライブ
2010年制作
本編18分

この映画の舞台は柳川市。高校2年生の吉田鈴子（藤沢玲花）が主人公です。鈴子は東京へのあこがれを抱きながら、米屋を営む母親と2人で、平凡で幸せな生活を送っています。そこへ現れた記憶喪失の青年との出会いが、鈴子と母親の運命を大きく変えていく、というストーリーです。今年、アジア最大級の国際短編映画祭「ショートショートフィルムフェスティバル&アジア2011」の旅ショット！プロジェクト部門に出品され、入選作品に選ばれています。DVDは、1260円で株式会社ジェイライブ (<http://jlive.tv>) とアマゾン (<http://www.amazon.co.jp>) のネット販売で購入できます。



▲上下とも日吉神社で行われた「町を歩けば」のロケ風景

スクリーン
銀幕に写る柳川の景観

映画監督の目には柳川の風景が
どのように映っているのか



映画監督 伊藤有紀さん

1979年三重県生まれ。志免町在住。日本大学大学院で芸術学修士号を取得。映画、ドラマの助監督を経てディレクターとしてデビュー。旅番組の仕事が縁で福岡に移住し、福岡市のCM制作会社に勤務。2010年にoffice ARIGATOを立ち上げ独立。厚生労働省の地域雇用創造推進事業「九州ちくご元気計画」のドキュメンタリー映画を撮影するなど、筑後地区を中心に活動中

一昨年、柳川を舞台に制作された短編映画「町を歩けば」。撮影は主に市内で行われました。作品では柳川を代表する川下りコースをはじめ、路地や干拓堤防が登場します。ロケ地に柳川を選んだ理由や魅力、どんな部分にひきつけられたのか。また、その魅力をどう整えていくべきなのか。作品の脚本と監督を担当した、映画監督の伊藤有紀さんにお話を伺いました。

すつごく贅沢だというのが
柳川の景観の第一印象

監督は、九州ちくご元気計画のドキュメンタリー映画の撮影をされているので、筑後全域の風景をよくご存じだと思えます。柳川以外にもいい景観はあったと思いますが、あえて柳川を選んだのはなぜですか。

柳川に対する第一印象は、なんて贅沢な環境だろうということ。住んでいる人にとっては、当たり前のごとくでしょうが、普通の家の脇に掘割があつて、そこを観光客を乗せた舟が行き交う光景を見て、本当にベネチアみたいな所だなと思っていました。そ

の印象がずっとあり、映画の話があつたとき、一番に思い浮かんだのが柳川だったんです。まず柳川の景色をどう映画の物語の中に自然に入れて、日本人の人に紹介したら魅力が伝わるかな、という発想で考えました。

それと合わせて、映画の主人公は東京の若い女の子なんですけれど、柳川の光景と合わないようですごく合うんじゃないか、いい意味でかけ算になるのではないかと考えています。

映画では柳川の景観を代表する川下りコースや、むつごろうランド近くの堤防が登場していましたね。そこを選んだポイントは何でしたか。

まず、この映画をだれに見せたか

たかというところ、東京や東北、北海道といった、九州のことを全然知らない人たちです。ですから川下りのシーンも多く、地元の人が見たら「またかと思われかな」と思いました。でも川下りの光景は、よその人にも一番インパクトを与えます。湯布院の人は「よその人は湯布院は由布岳しかないと思つとる」といって由布岳のイメージを嫌うそうです。でもよその来た人は由布岳を見たいんですよ。川下りのシーンは、自分が受けたインパクトを、遠くの人たちにも伝えたいということなんです。

それと初めて干拓に足を伸ばしましたが、波のない海はなんてきれいなんだろうと思いました。きれいでものさびしくて、主人公の女の子が干拓を背景にして海を見つめるカットは、一番気に入っています。ここは掛け値なしに撮れてよかったなと思えるカットでしたね。

まわりの個性を磨き
いいと思えるものにすべき

監督にとって、土地の景観とはなんでしょうか。どう整えていくべきかと考えていますか。

筑後一円を撮影で回っていますが、どのまわも持っている個性というか、色が全然違ってきますよね。その土地の景観は、先人たちの思いの結晶だと思います。同じ場所に住ん

ていると、その土地の良さが当たり前になって、気付かなかつたり忘れたりされがちです。故郷の三重でもそうですが、田んぼがあつて山があつて、のどかで良かったんです。ところが、たまに帰るとコンビニがたくさんできて、地元の人には喜んでいますが、いいところを潰しているなあと、残念な気持ちになります。

景観を整える上で大切なことは、よその都会がこうだからとか、県内の都市部がこうだからではなく、もともとあるものの良さを伸ばしていくべきじゃないかと思えます。このまわにも、そのまわだけの個性があります。それは全部いいと思うんです。だから柳川だったら、せつかく掘割とか有明海があるんだから、それをなくして別のものにするんじゃないかと、あるものを、もっともつと磨いて、よその来た人や住んでいる人にとって、いいと思えるものにしていくべきだと思います。

最後に今後の抱負をお尋ねします。

柳川に限ったことではないのですが、地方のまわでは、若者の都市への転出、高齢化が問題になってますよね。僕も東京に11年いましたが、結局、自分の居場所じゃないと気がきました。若者が都会に目を向ける前に、生まれ育った場所の良さに気付けるよう、映像制作の仕事を通じて貢献できればと思っています。

長谷健が原作を書いた映画「からたちの花」を始め、柳川はしばしば映画のロケ地になります。映画に紹介され始めたころは、原作が柳川を舞台にしている作品が多かったものの、最近では柳川の風景にひかれてロケを行う作品が見受けられるようになりました。映画を製作している人たちの目には、柳川の景観はどう映っているのでしょうか。